

令和七年度 お茶の水女子大学 文教育学部
学校推薦型選抜 帰国生徒・外国学校出身者特別選抜

試験問題

人文科学科（比較歴史学プログラム）

【注意事項】

- 1 監督者の指示があるまで解答を開始しないこと。
- 2 試験問題は、この表紙を含めて3ページある。万一落丁等がある場合には拳手をし
て監督者に知らせること。
- 3 試験問題および下書き用紙は、持ち帰ること。

令和七年度 お茶の水女子大学

学校推薦型選抜 帰国生徒・外国学校出身者特別選抜 試験問題

文教育学部 人文科学科 (比較歴史学プログラム)

【問題】 次の文章を読み、以下の問いに答えなさい。

現在、歴史・歴史学が直面している最も厄介な問題は、社会のなかにも多くの歴史がみちあふれかえっていることだろう。テレビの大河ドラマ、大型歴史ドラマ、様々な時代劇、歴史ドキュメンタリーなどの番組。数多くの歴史小説、推理小説、歴史ノンフィクション。アニメ、劇画、漫画など。そこから派生したキャラクターがゲームや広告に繰り返し登場している。そして観光地に行けば、その地にわずかでも縁のある歴史的人物にちなんだお土産グッズが大量に売りだされている。

この歴史の氾濫は現代のメディアによって作られたものである。しかも様々なメディアが連動し、歴史のイメージを増幅して膨張させているのである。これまでも、歴史学の外に様々な歴史があった。講談、大衆小説、芝居などで語られ、演じられる歴史は大衆的人気を博してきた。それらが多くの人々の歴史観の形成に果たした役割は大きいだろう。だが、そうした歴史に歴史学から見て誤りや不当な美化が含まれていたとしても、歴史学がそれに積極的に反論するといったことはほとんどなかった。歴史学とメディア文化の歴史とはまったく別次元の問題としてあったのである。

しかし、現代では、メディアが生産する歴史の規模は無視できないほど巨大で、遍在している。しかもたんに規模が大きいだけでなく、社会全体の変化、特に近年の情報革命とかIT革命とか様々な言葉で喧伝されているメディアの激変と深く結びついていると考えられる。あふれている歴史のなかには、いわゆる大衆小説、ノンフィクションなど従来からある出版文化から産み出されているものも多い。だがそれ以上に大きな割合を占めているのはテレビ、映画、広告、インターネットなど、最近はますます多様化し、生活の隅々まで浸透している電子メディアである。大衆小説なども電子メディアと結びつくことによって話題となり、ベストセラーとなっているのである。近年の電子メディアの映像技術はコンピューター・グラフィックスなどを駆使して非常に高度化している。本来、映像メディアは映像が存在しなければどうしようもなく、歴史は最も得意な分野であったのだが、現在では古い映像などまったく存在しない過去を最新の技術を使って「再現」することは造作もなく、メディアでは常習化している。それが歴史的に正確かどうかは証明されることはないのだが、少なくとも迫真的に見え、多くの人々を惹きつける。

今や電子メディアにとって歴史はありとあらゆる作品を生産できる資源となっている。電子メディアこそ現代のIT革命の中心で、それは巨大なモンスターのよう到现在の社会を覆いつくそうとしているようにさえ見える。現代のメディア激変は歴史・歴史学が自明の前提とし、それゆえに格別意識してこなかった歴史・歴史学とメディアの関係を基底的なところで揺さぶっていることは間違いないだろう。歴史学はこれまでとまったく異なるメディア環境に直面しているのである。

コンピューター技術に依拠した情報メディアの大規模で急速な発達とそれがもたらす社会・生活・文化の大変革こそ、現代社会の歴史的革命なのだという言説は広く蔓延している。それは決して的外れとは思われない。しかしながらメディアが大きな歴史的革命を引き起こすというのは、歴史に対する一つの見方、一つの歴史観である。「中略、このような歴史観をメディアの文明史と呼ぼう。この歴史観によれば――出題者注」現代は印刷メディアの時代から電子メディアの時代への大転換期なのである。印刷メディアにおける読書は、文頭から順序を追って文末に

進む。文字は一定の論理にもとづいて文脈を構成しており、何らかの論理がなければ意味をなさない。線形に進行していく読書という行為自体に時間の契機が内在している。また記録された文章は保存され、繰り返し読み返すことができ、相互の矛盾あるいは蓄積・発展が次の思考を生み出す。そうしたメディア経験は論理的、分析的、客観的な思考が育つ土壌となる。

それに比し電子メディアが作りだす音響を伴った映像は瞬間的な体験である。様々な要素が平面的に共存している映像を一瞬で感じとるのである。瞬間的体験は連続していくが、論理的につながりはなく、あるのは連動である。今あった場面は一瞬でまったく異なる場面に切り替わり、そのめまいが効果をあげ、興奮を高める。そうした感覚的メディア経験からは歴史意識（それは筆者によれば「自分たちがどのような歴史の流れのなかにあるのか」という問題意識）である——出題者注）は形成されにくいだろう。歴史意識は歴史を研究し考える学問の基盤であるから、歴史意識がないところでは歴史学も存立しない。電子メディアの社会・文化は反歴史的・反歴史学的なのである。

メディアの文明史が説くようにメディアが人間の思考・感覚を変化させることは確かであろう。しかしながら、メディアをその物理的特性ということだけで説明してしまうのは、やはり早急である。メディアは半面では社会組織なのである。たんに物理的にメディアが存在しても、メディアは機能しない。紙とインクと印刷機械があるだけでは新聞紙や書籍といったメディアにはならない。それらを組織する新聞社・出版社がなければならぬ。電波があっても放送会社・携帯電話会社などが活動しなければ放送やインターネットは機能しない。しかもそうした電子メディアは国家が作り運用している制度のうえに乗っているのである。一定の社会組織・政治組織があって初めてメディアは機能している。

社会組織としてのメディアは決して無色透明の媒体ではない。社会組織・政治組織の本性からして特定の偏向性をもっている。しかしメディアの物理的特性と社会組織の両面をとらえるのは難しい。メディアを見ることは容易にできないからである。確かに我々はテレビやパソコンの画面を見ているのだが、その内容を見ているのであってメディアとしてのテレビやインターネットを見ているわけではない。それがどのような社会組織・政治組織であるのかなどは見えないのである。

こうした状況において、見えないメディアを見る最も重要な方法は、過去を見ること、歴史を知ることである。メディアは一瞬一瞬新しい現在を生産し、現在を次々に消去していつている。しかしその現在とそれを作っているメディアは歴史のなかにある。忘れ去られ消えていつている過去を不断に回収し、現在の社会、メディア、そして我々自身を歴史的過程のなかで考えることによって現在は見えてくる。

過去を見ることによって現在が見え、様々な道が浮かんでくるはずだ。しかし、過去は自然に見えてくるわけではない。そこには見ようとする意思がなければならず、歴史学はその要請に応えるものでなければならぬだろう。

出典：有山輝雄「歴史学とメディアの現在」（歴史学研究会編『歴史を社会に活かす——楽しむ・学ぶ・伝える・観る』東京大学出版会、二〇一七年）。引用にあたり、省略・改変したところがある。

問一 傍線部「現在、歴史・歴史学が直面している最も厄介な問題は、社会のなかにも多くの歴史がみちあふれかえっていることだろう」とあるが、筆者はなぜそのように考えるのか。筆者の見解に即して、二〇〇字以内で述べよ。

問二 筆者は現代において「メディアを見る」難しさゆえに「過去を見る」歴史学に期待している。もしあなた自身が歴史を研究するとしたら、どのような課題のために、どのように過去を見るのが有効だと考えるか。「過去を見ること」によって現在が見え」と考える課題を一つ定め、それにふさわしい複数の具体例を挙げて比較しつつ、六〇〇字以内で述べよ。なお、課題・具体例についてはメディアに限らず自由に挙げてよい。また、具体例の国、地域、時代も限定しない（日本が含まれていなくてもよい）。